

「知」の年輪を育てよう

◎いま、学校に若い教師が増えてきました。団塊の世代が退職期を迎えて、世代交代が進みつつあります。さらに安上がりな教育行政の影響で、臨時的任用や非常勤採用などの非正規雇用の教師も大幅に増えています。

◎また教師たちには、計画書や報告書の作成などのいわゆる雑務が増加し、教材研究の時間や、子どもとふれあう時間も十分確保できない状況が現出しています。そのうえ学校には職階性ももちこまれ、強化されました。その結果、先生たちの連帯の力が削がれ、授業づくりにおたがいの知恵をだしあう同僚性も失われてきています。

◎また、文部科学省は、全国統一テストによる各県の順位を公表しました。その影響で、多くの県で順位を上げろという声が強まりました。その後、統一テストが任意参加になったにもかかわらず、参加表明する市町村があいついでいます。教師たちは、成績を上げるよう努力をさらに求められ、いままで以上に暗記と習熟に専念するよう、駆りたてられてもいます。

◎一方、子どもたちには「ゆとり教育」の反動から、学習時間の増加が図られ、学校での生活も長時間になりました。

◎心ある教師が、東アジア型教育を乗り越えようと、対話を重視したグループでの学びあいに取り組む姿が、全国教育研究集会で報告されました。しかし全国的には、黒板に向かっての暗記と習熟型の東アジア型教育が支配的で、そこからの脱皮には課題が山積しています。



◎いま子どもたちに必要なのは、受動的にあたえられたことを覚える「勉強」から脱して、知的好奇心をもって活動的な「学び」を実現することではないでしょうか。

◎『ひと』誌は、1973年の創刊から、学ぶ者の視座にたって教育を考えるオールタナティブな実践を生みだす努力を続けてきました。『ひと』誌に多くの先進的な授業実践者が集い、授業を発表してきました。

◎『ひと』誌は一貫して、学校や教育の閉塞にたいして、人間・社会・市民の常識にもとづいて新鮮な空気をおくりつづけてきました。

◎そこで蓄えた授業の知的エネルギーを、いまこそ、混迷を深める教師たちに、社会や市民にも、手渡す必要があると感じます。

◎『ひと』誌で活躍した教師たちの授業を「ひと」BOOKS・シリーズとして刊行し、子どもたちの学びをより豊かにしていくための一助となるようにしたいと考えています。



◎木々は寒さや暑さに耐え、年輪を刻みながら成長し、やがて巨木に育ちます。

◎教師も、子どもたちも、わくわくするような「知」の授業体験を積み重ねて、「知の年輪」を増やし、大きな巨木に育ってほしいと願っています。

◎このシリーズが、そのお役に立てることを祈念します。

「ひと」BOOKS編集委員会

はじめに

「社会科の授業は、覚えるだけでつまらない」

「歴史は暗記ばかり」

そんな子どもたちの嘆きが聞こえてきます。

社会科はいつのまにか、“嫌いな教科”にランクインしてしまいました。

受験のために点数を多くとらねばと、暗記中心の授業。

覚えることに、消耗する日々。

むなしさを感じるのは、教師も同じかもしれません。

歴史の教科書は、叙述のみによって占められています。

どのようにその歴史叙述が究明されてきたのかは、教科書に現れず、事実の羅列がえんえんとつづられています。

そこに、子どもたちは単調さを感じ、気持ちが沈んでしまうのでしょう。

教師も、伝えねばならぬ多くの項目に圧倒されてしまいます。

歴史の楽しさをダイナミックに感じるには、どうしたらよいのでしょうか？

歴史家の仕事場に焦点をあて、その作業を追体験すること。

そこに活路がみえてくると思います。

歴史家は、歴史の舞台の裏側に潜んでいる事実を、史料や文献などから掘りおこします。

その歴史家の作業に限りなく近づくことを意識すれば、授業に変化がおき、子どもたちの心に化学反応をおこすことができるのではないのでしょうか。

たとえば、ちょっと古いのですがインディ・ジョーンズの映画のように。歴史の謎を解くために、彼は対象を追いかけ、波瀾万丈の冒険をおこないました。

この映画は観客を熱狂させました。あのハラハラ・ドキドキを教室にもちこめたら——。子どもたちは歴史を学ぶ面白さを認識すると思うのです。

歴史家の作業に近づこうと授業したのが、この6本の授業です。

歴史の時代、時代に、当時の人びとが感じたこと、その風やにおいや臨場感を感じようと試みた授業です。

御成敗式目の追加法から当時の鎌倉のまちを感じたり、学校の特別教室から明治の教育に迫ったり、帝国議会の再現をとおして婦人参政権を考えたり、1枚の写真から長崎の被爆を追体験したり、庚申^{こうしんとう}塔から江戸時代の農民の気持ちに迫ったり、南太平洋のヤップ島の石貨から地域通貨を考えたりした授業です。

この授業のなかで、子どもたちは小さな歴史家の顔になりました。

証拠からできるだけたくさんの情報をひきだし、仲間と対話しながら解釈し、推論をし、吟味していきました。

授業は、歴史家の仕事場のようでした。

これらの授業は、子どもから大人まで、さまざまな場面でおこないました。学校では小・中・高・大の、いろんな学年におこなったものです。もし、このような授業をしてみたいと思う人は、自分の担当学年などにあわせてアレンジしてみてください。

少しでもみなさんの授業のお役に立てれば幸いです。

千葉 保

はじまりをたどる「歴史」の授業 目次

「ひと」BOOKS・シリーズ発刊にあたって……………2

はじめに……………4

「特別教室」の授業——校舎が語る、知られざる学校の歴史……………9

1—日本の学校の幕開け……………10

いまはいろいろある特別教室／明治初めの校舎は西洋モダン／どの順序でできた？ 音楽室、理科室、家庭科室、図書室／学制発布で、女子が学校に来なくなった？／女子就学率を高めるための「裁縫室」

2—世相を反映する学校の校舎……………20

日清戦争後にできた「唱歌室」／第一次大戦後にできた「理科室」／さて、図書室はいつできたのか

「石貨」の授業——お金の原点を考える……………29

1—小さな島の大きなお金……………30

巨大な石の円盤。これなあに？／大正時代、この石貨の価値は？／日比谷公園の石貨は、どこからやってきた？／石貨は何に使われた？／石貨の価値は、何で決まる？／お金は動かず、所有者だけが変わる

2—通貨の意味を考える……………43

物語のないお金の流入／日本の統治時代のヤップ島の貨幣は？／限られた地域だけで使えるお金／信頼でまわる地域通貨

地域の授業をつくる1

墳墓「やくら」の授業——中世のお墓からみる幕府政治……………55

1—地域にあった中世の出来事を知る……………56

鎌倉幕府の法令文に挑戦!／鎌倉にお墓禁止令がでた?／当時は大混雑だった鎌倉のまち

2—お墓からみえてくる歴史と政治……………64

では、お墓はどこにつくった?／「やぐら」の正体は武士のお墓／庶民はお墓をどうしてた?／お墓から政治の変遷がみえる

地域の授業をつくる2

「庚申塔^{こうしんとう}」の授業——江戸時代の民間信仰を知る……………73

1—石仏を観察してみる……………74

「かのえさる」の日は眠らない／①—庚申塔の写真を見せる／②—庚申塔の彫刻を調べる／
③—青面金剛の役割は?／④—三猿と鶏がいるのは、なぜ?／⑤—年号から造立時期を調べる

2—江戸の庶民の恐れと願い……………82

⑥—十干・十二支。昔の暦を知る／⑦—造立者名の由来を考える／⑧—人びとは何を恐れたのか／⑨—三猿は日本独自のもの?／⑩—ほかにもあった、庚申の日のタブー／⑪—グループでディスカッション

「婦人参政権」の授業——法案成立までの議会を演じて学ぶ……………91

1—明治民法下の女性たち……………92

明治末期にわきあがった女性たちの声／女性の地位と選挙権を考える／明治時代の女性は、政治集会に参加していた？／婦人参政権の審議は、いつ始まった？

2—昭和初期の議会を再現！……………98

昭和4年・第56帝国議会／昭和5年・第58帝国議会／昭和6年・第59帝国議会

3—敗戦後の審議のようす……………107

昭和20年12月・第89帝国議会／女性が選挙権を行使した、初の総選挙

「1枚の写真から戦争を見つめる」授業

——10歳が体験した長崎の記録から……………115

1—焼き場に立つ少年……………116

少年は何を見つめていたのか／長崎の町を写した写真から

2—10歳の少女が体験した原爆……………121

戦時の小学校のようす／8月9日に何が起こったか／原爆投下から3日後の少女と家族／亡くなった人を自分たちで焼いた

3—クラスみんなで考える戦争……………128

ふたたび少年について考える／被爆後、学校はどうなった？／少年は生きただろうか／写真を使った歴史の授業

〈オリジナルの授業をつくる手法・考〉……………136

おわりに……………141

「特別教室」の授業

——校舎が語る、知られざる学校の歴史

音楽室、理科室、家庭科室、図書室……。学校にはたくさんの特別教室があります。それらがどんな順番で、どんな理由からできたのかを調べていくと、学校の隠れた歴史がみえてきます。

明治の学制発布後、普通教室も不足していた日本の学校に、特別教室は、いつ、どんな要請があって設置されたのでしょうか。「特別教室」をテーマに授業をつくってみました。中学2年生とおこなった授業の記録です。



長野県松本市にある旧開智学校(明治9年竣工)

©663highland

1—日本の学校の幕開け

いまはいろいろある特別教室

最初に、現在、学校にある特別教室をあげてもらいました。

——学校には、どんな特別教室がありますか？ 小学校の校舎を思い出してみましょう。

「おれ、音楽室が好きだった。昼休みによくドラムたたいたな」
「わたしは糸ノコ使って工作するのが、楽しみだった。図工室が好き」
「わたし、本が好きで、休み時間はいつも図書室にいたわ」
「ぼくは理科の授業がいちばん好きだった。理科室の薬品の匂いがたまらなくよかった」(笑)
「6年のときはよくパソコン教室で調べたよ。総合の時間がおもしろかった」
「調理実習では家庭科室でサンドイッチつくったな」
「わたしも家庭科室で、ミシンでエプロンづくりしたわ」
「視聴覚教室もあったな」

——みんなからでたのは、「音楽室」「図工室」「図書室」「理科室」「パソコン教室」「家庭科室」「視聴覚室」だね。では、きょうはそのなかの「音楽室」「図書室」「理科室」「家庭科室」の4つの特別教室をとりあげて、どの順番に、どんな理由でその教室ができたのか、考えていきましょう。

明治初めの校舎は西洋モダン

最初に、日本に学校ができた明治初めのようすを見ていきました。



写真＝裏辺研究所

——日本の学校制度は、明治5年から始まったのだけど、明治初めの学校はどんなようだったのか、写真を見て考えましょう。

「わあ、カッコいい！」

「こんなにすてきだったの？」

「わたし、こんな校舎なら通いたい！」(笑)

「どこの学校ですか？」

——これは明治8年に長野県佐久市にできた中込^{なかごみ}小学校(旧中込学校)です。いまでも重要文化財として保存されています。

「白い校舎でいいなあ。わたしもこんな校舎で学びたい！」

「塔があって、ほんとうにカッコいいなあ」

「校舎の窓もしゃれてるよねえ」

「バルコニーがあってモダンだね」

「なぜ、塔があったの？」

——ここには太鼓がおかれて、勉強の開始や終わりを太鼓で知らせたんだよ。

「えっ、チャイムじゃなくて太鼓の音で知らせたの？」

「なんか、いいなあ」

「ロマンチックだね」

「むかしはこの学校も、こんなにすてきだったの？」

——松本市に残っている開智かいち小学校や宮城県みやぎの登米とよま小学校など、各地にいまも残っているよ。

「明治政府が、こんなにすてきな学校をつくらせたの？」

——明治5年の学制発布当初、政府は、近代学校になることを象徴するような立派な建物をつくってほしいと期待したそうです。西洋式の教育をおこなうには西洋式の学校でなければならないとして、このような洋風建築の学校をつくりあげたんだね。

「外国人につくってもらったの？」

「きっとそうだよ。日本人にはまだ無理だったかも」

——設計施工者は多くがその地方の宮大工さんで、近代的学校ってよく知らなかったから、横浜など開港した場所にある洋風建築を見て、見よう見まねでとりいれて、それに和風のデザインも加えてつくりあげたそうです。

「すごいな。明治の人もがんばってたんだね」

「尊敬しちゃう」

「建築費は政府がだしたの？」

——政府はビター文もださず、すべて学区の人びとが、集金をしたり寄付を集めたりしてつくったそうです。月掛け集金帳や日掛け集金帳なども残っているそうです。

「えっ、政府は声かけだけ」

「地域の人のがんばって、お金だしたんだ」

「政府はずるいなあ」

「地域の人たちはえらいなあ」

——しかし、このような洋風建築は高価だったし、台風で太鼓楼が飛ばされて修繕費がかさむことなどから、政府はすぐに、学校建築は必要な機能のみを満たせばよいとして、安上がりで丈夫な和風の校舎を奨励するように変わっていきました。明治7年から12年ごろまでのわずか6年間で洋風校舎の最盛期で、その後は急激に少なくなっていったそうです。

「わあ、残念！」

「こんな校舎で勉強したかったなあ」

どの順序でできた？ 音楽室、理科室、家庭科室、図書室

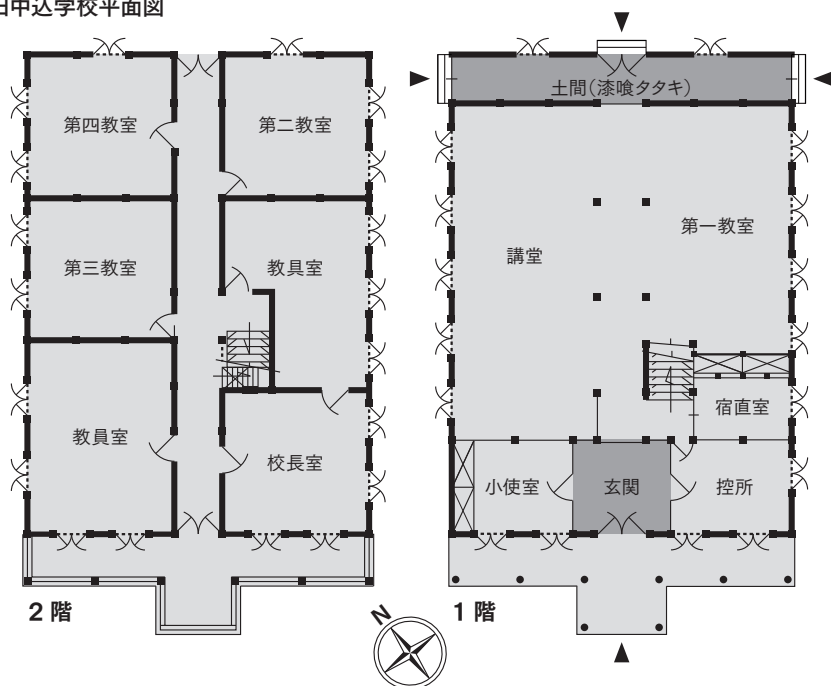
——では、この校舎の見取り図を見てみよう。どんな教室があるかな？ 特別教室はいくつあるかな？

「図書室あるかな？」

「理科室はあるかもよ」

ここで校舎の配置図を配りました。

●旧中込学校平面図



資料をもとに作成

「講堂がある」

「教員室と校長室も」

「こづかい小使室や宿直室もあるね」

「教室は4つしかないね」

「うん、特別教室はないなあ」

——明治の初めの学校には特別教室がなかったね。「音楽室」「理科室」「家庭科室」「図書室」が、どの順番で、どんな理由でできていったのか考えてみよう。グループで相談して、この4つに順番をつけて、つくった理由も考えてごらん。

「小学校の校舎で考えるの？」

——日本で初めてできた学校が小学校だから、小学校の校舎で考えよう。当時とは教室の呼び方が違うものもあるかもしれないけど、教室の役割で、できた順番を考えよう。

グループでの相談が始まりました。グループをのぞくと、こんな話し合いをしていました。

「わたしは、いちばん最初にできたのが図書室だと思う。子どもたちにいっぱい本を読ませて、賢くしたかったんじゃないかと思うけど」

「そうだな。ぼくもそう思ってきた」

「でも、日本で学校ができたのは明治の初めだろ。全国の学校にたくさん本をそろえるお金があったかな？」

「お金かあ、それも問題だよね」

「地域の人の寄付を、またもらったのかも」

「でも、地域の人には、校舎建築でお金をださせられてるよ」

「そうか、楽器は高いから、音楽室もあとのほうかな？」

「そうだよ。理科室もお金がかかりそうだな」

「お金で考えると、家庭科室かな？」

「家庭科室だって、ミシンなんか高いでしょ」

「でも、明治の初めにミシンなんてあった？」

「うーん……」と、生徒たちは考え込んでしまいました。

「お金だけで考えていいのかなあ」

「そうだよ。学校で何をいちばん勉強してほしいかを考えないといけないのでは？」

「その点で考えると、やっぱり図書室かなあ」

「明治政府もがんばって図書室をつくったと考えましょう」

「いちばん最初が、図書室！」